

「ことばの海」を生きた父

※父 大岡信に献ぐ

日々を彩る四季のめぐりが、気づけばいつのまにか、夏を連れてきたようです。樹木の緑滴るなかを鳥や虫が躍動し、時おり、夕立ちに洗われる街。そんな時なぜか私は、そこかしこに父が居ると感じるのです。

今年の桜が晴れやかに、沁み入るように咲いていた春の朝、八十六年間ともに歩んだ肉体を大地に還し、父は魂のふるさとへ住み処を移しました。それはまるで、生前に好んだ西行のうた「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」に倣うかのようで、私は、父の追悼特集が組まれた雑誌に発表した、父を送る短歌五首の詞書に、その感慨を「あはれ（天晴れ）」と記しました。父親を亡くしたばかりの娘の言葉として、「天晴れ」はふさわしくないかもしれませんが、青年の日に心に刻んだ天命を全うするため、生涯をかけて懸命に存分に生きてであろう父だからこそ、また、あらゆるものの源に無事に迎え入れられたらと思うたからこそ、言祝ぐ気持ち湧いたのです。その、ひとの生の根源に触れる感覚が、「そこかしこに父が居る」と私に思わせるのかもかもしれません。

父のことは、長いあいだ新聞に連載していた、『折々のうた』というコラムの著者としてご存知の方がおいでだと思えます。採りあげる作品は短歌と俳句に限定しない、という条件で連載を引き受けたので、短詩型文学以

外の作品もたくさん紹介しているのですが、当然ながら短歌と俳句は圧倒的に多いことから、父を詩人ではなく、「日本の古典文学研究者」と思っておられる方もあるようです。そのためか、「お父さんは、家では着物を着ているの？」と聞かれたことも一度ならずあります。実際のところ、着物を着るのは特別な時で、年間365日働くという実態に即した仕事着としては、体を楽に保てるせいか、着古したジーンズをいつも着用していました。

父の人生は、広くて深い「ことばの海」を泳ぎまわって全貌を理解したい、それを誰かと分かち合いたい、ただ一途に、その思いで歩んだものだったと思います。また、父にとって「ことば」とは、いわゆる「言語」に限ったものではありませんでした。おそらく、絵画や音楽など、ありとあらゆるものの「ことば」、言い換えると「そのものが発する意味の波動」に共振してしまうため、興味の範囲は文学に留まらなかったのです。父親である大岡博が窪田空穂門の歌人で、歌誌『菩提樹』を創刊、主宰していたことにより、父は幼い頃から短歌、ひいては日本の伝統的文芸に親しんでいましたが、終戦後、海外の文芸に接してからは、シュルレアリスムの文学や絵画に傾倒もしました。ポードレル詩集と新古今和歌集を併読するような学生時代だったのです。

のちに外報部記者として新聞社に勤めていた時は、詩や批評などの執筆活動をするほか、現代美術を扱っていた『南画廊』の展覧会カタログに寄稿することが度々ありました。そこで育んだ交友関係は、国内外を問わず、詩人や画家、音楽家をはじめ様々なジャンルの人たちに

及び、その結果、版画作品に詩を提供したり、立体作品や版画の制作を画家とともに手がけたり、作曲家によつて詩に曲がつけられたりなど、他者と一緒に制作をするということにも繋がっていきました。

父は後年、同人誌『權』の仲間とともに、連歌から着想を得た「連詩」を始めることになります。その理由の大きなものとして、古来、日本の伝統的文芸には当たり前前に存在した、複数の人が和して作品を紡ぐという「他者に対して開かれた在り方」が、当時の現代詩には見受けられない、ということがありました。ご存知のように、連歌や連句での「合わす」という姿勢には、単に「和して楽しく一緒に作品を作る」のではなく、お互いのことばを正確に理解し合い、ときには批評もし、そのうえで相手も自分も生かすということを求められます。いわば、実作者と読者という両方の役割を場にいる全員が担うわけですが、現代詩はときに、読者を置き去りにしているようでもあり、その現実には父にとって、絶望と云ってよいほどの不安感を抱かせるものでした。予見されていたのは、自らが生きる場として選んだ、現代文学の一端を担っているはずの道の終息でもあったからです。そして、そこからの救いの一環として、連歌に倣う形で連詩というものを始めたわけですが、今になって振り返れば、画廊を中心にして始まった多くの友人関係も、他者と「合わす」ことから得られる有形無形のことを父に教えていたのだらうと思います。

このように、父の生活の一切は「ことば」のためにあ

りました。人と人を繋ぐもの、過去と現在を結ぶもの、現実と空想に橋をかけるものとして、ことばが持つ力は計りしれません。その恵みを分かち合うための水路を、父は弛むことなく作っていたような気がします。まるで、一秒でも多くの時間を、「ことば」とその恵みのために捧げたいようでした。最後に、それを物語る出来事をご紹介します。

新聞社に勤めて十年目の春、パリ駐在員としての渡仏を目前に、執筆活動に軸足を移すため、父は退職したのです。退職の理由はほかにもあり、その決断には首肯しますが、当時の我が家には、四歳の兄と、生まれたばかりの私がいきました。もしかすると、乳飲み子を抱えながら、定職から去る夫に文句ひとつ言わなかった母のありようもまた、「天晴れ」といえるかもしれませぬ。